

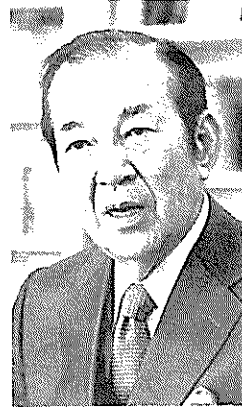
1月1日(月)

2018年(平成30年)

発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1

〒100-8051 電話(03)3212-0321

毎日新聞東京本社



中村監撮影

山内昌之 明治大特任教授

68年の現代史における意味を歴史学者の山内昌之・明治大特任教授に聞いた。

【聞き手・高木香奈】
68年は、約20年後の冷戦終結やソ連解体を経て世界が大変動することを予想させる節目となった年だ。第二次大戦終結から約20年で、20年ほどのサイクルで歴史が変わるような出来事が起きている。

私は当時大学生で、68年は自分が現代史として体験した時代だ。日本はまだ、国際的には十分に存在感を発揮していなかったが、平和と高度成長により独自の歩みを始めていた。

当時はベトナム戦争の真っ最中。ケネディ政権を継いだジョンソン政権も解決しきれず、北爆停止を宣言した。米国の価値観が揺らぎ、数年を経て戦争が終結した転換期となった。

やまうち・まさゆき 1

947年生まれ。東京大名誉教授。専門は国際関係史、中東・イスラム地域研究。

ソ連や東欧でも動きがあった。ソ連を理想の国だと考える人々が日本にもまだいたが、人々は社会主義体制下の自由や人権の不在にも気づいていた。その中で「ブラハの春」が始まった。東欧の自由を求める動きに、対しソ連が武力介入したことは衝撃だった。

西側の資本主義圏でも環境問題などひずみが目立った。ハリで5月革命があり、日本では日大や東大の紛争があった。当時の西側の学生らに共通していたのはエリート意識の限界と甘さ。西側の学生運動がやがて消えていった理由は、自由を熱望する東欧の人々と切実さが違ったからだろう。

強烈的な軍事力による他国からの侵略や権利侵害に対して人々はどう抵抗し、また抵抗できなかったのか。戦後平和の享受者であり、今は安全保障環境の大きな変化に直面している日本はどうすればいいか、考えるきっかけとしても68年は思い出す価値がある。